２０２６年度　通常総会議案書

日　時　２０２６年3月１５日（日）１０：３０～

場　所　余市エコビレッジ（余市町登町１８６３）

議事次第

１　理事長挨拶

２　議事録署名人の選任

３　議事
　第１号議案　２０２５年度事業報告について
　第２号議案　２０２５年度決算報告について
　第３号議案　２０２６年度事業計画案について
　第４号議案　２０２６年度収支予算案について
　第５号議案　役員改正案について

４　その他報告・検討事項

＜第１号議案＞

NPO 法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト通常総会

2025年度事業報告について

１． 概 況

２０２５年は、ウクライナやガザの戦争が続く中、トランプ政権による気候変動対策や関税等の政策転換が国際秩序の混乱を招き、経済格差や社会分断が世界的に拡大した。道内においても、気候変動の影響で一次産業が大きなダメージを受けたり、泊原発の再稼働が決定したりして、住民の生活に関する不安が深まった。

激しく変化する時代の中で、人と人とのリアルなつながりや、地域で自立し支え合うコミュニティの重要性が一層求められている。当団体は自ら食とエネルギーを自給し、地域で分かち合う「ローカリゼーション」を実現するために、まずエコビレッジ敷地内のエネルギー自給を進めると同時に、それを地域に広げていくプロジェクトに着手した。防災や健康という誰にも関連のあるテーマで、区会などの地縁組織とも連携を深め、地域での認知度が高まった。

その他、農的暮らしやピースワイン、ウェルビーイングをテーマにした主催イベントを積極的に開催した。スタッフやボランティア、会員の貢献に加え、助成金や寄付金収入が増額したため、全体的には比較的安定した経営となった。

２． 余市エコカレッジ（主催事業）

「農的暮らしの連続講座」を月 1 回・計 8 回に番外編３回を加えて、作物の栽培や加工、保存をテーマに学習を重ねた。（参加のべ人数 47 名）会員の仁科さんが講師を務めたり、瀬野さんが陸稲の栽培に挑戦したり、加藤さんがランチを作ってくれるなど、会員による主体的な運営が行われた。

重点課題の「省エネ・創エネ」については、学術研究者やメーカーなどの専門家による意見交換会をオンライン開催したり（合計参加者数 17 名）、北大工学部山形ゼミの協力を得て、シェアハウスにおけるエネルギー消費について検証したりした。中古の電気自動車を購入し、ソーラーシェアリングの電気で充電して、町内の買い物や送迎等に利用したところガソリンの使用量が約半減した。さらに、太陽光発電の自家消費率を高めるために、車からシェアハウスに給電する準備を進めている。

さらに、大きな前進だったのは、エコビレッジ敷地内だけでなく様々な資源を集落単位で共有し、災害時に助け合おうという「よいち未来共創プロジェクト」が立ち上がったことである。（秋山記念生命科学振興財団の助成）エコビレッジの実践や知見を広く一般公開するイベント「風と土と光の暮らし方研究会」（参加者数 8 名）に加えて、欧州や国内の先進事例を学ぶ勉強会（参加者 17 数（オンライン含む））や、近隣住民が参加する資源発掘ワークショップ（参加者数 7 名）、町の防災計画に関する勉強会（参加者数５名）を開いた。

恒例のワークキャンプは春、夏、秋の３回開催した。５月は道内の学生を中心に畑起こし、７～９月は英国カーディフ大学の学生たちとワインブドウの栽培管理、秋は調理トマトの加工保存などを行った。（合計参加者数 18 名）

また、みらい RITA 財団の助成を受けて行った「ウェルビーイング・ワークショップ」（7 月、参加者数 18 名）は、エコビレッジ独特の自然に寄り添う暮らしをベースに、各自のウェルビーイングを掘り下げ、多様な年代が未来を考えるプログラムとして開発した。同ワークショップは、会員の他に、北海道大学、北海学園大学、東京の経営者など多様な人を対象に行って好評だった（合計参加者数 115 名）。

ピースワイン関連では、５月の植樹イベントで目標である 21 品種のブドウ苗の植樹が完了した。（参加者数 17 名）10 月にはビンヤードクラブのメンバーと、昨年登醸造に委託したピースワインの試作品を試飲した。ユナイテッドピープルの関根さんや北海道大学の留学生ら外国人10 名を交えてブドウを収穫し、11 品種で２作目を試作している。（参加者数 24 名）

その他、通年で多様なイベントを開催した。

・「戦地で生まれた奇跡のレバノンワイン」の映画上映会（３月）（参加者数 13 名）
・気候変動に関するオンラインセミナー（４月）（参加者数 70 名）
・ビンヤードクラブ体験会（５月）（参加者数 22 人）
・ドメーヌ型ワイナリーを訪ねる旅（7、８月）（合計参加者数 22 名）
・「ブドウ収穫＆ワイン仕込み＠登醸造」の体験イベント（９月）（参加者数 12 名）
・「ハーバルライフを楽しむ講座」（6，7，８月）（参加者数のべ 29 名）、
・カフェ会（３月 bokashi、６月みんたる　合計参加者数　22 名）
・感謝祭（11 月）（推定参加者数 70 名）
・「出版記念イベント」（10 月東京、11・12 月札幌）（合計参加者数 75 名）

３.　余市エコカレッジ/体験・研修プログラム（受託事業）

幅広い学び手に対して、エコビレッジの暮らしや地域での実践をベースに、グループごとの課題や要望に併せた企画、コーディネートを行った。内容は充実しており参加者の満足度も高かったが、件数、受入れ人数ともに減少した。（以下）

北海道大学農学部（24）、北海学園大学経済学部（17）、京大援農サークル（3）、聖徳学園中学 13）、北海道教育大付属中学（116）、シュタイナースクールいずみの学校（19）、あきた未来塾（秋田銀行）（15）、コウハウジング研究会（11）、NPO 法人会計税専門家ネットワーク（10）、Climate Reality Japan（3）、NPO 法人いんくるらぼ（8）、余市おためし移住ツアー（余市町）（11）、Blue Village（7）、NPO 北海道地域・自治体問題研究所（13）　他（順不同）

4　教育ファーム

刈草やイタドリのチップなど植物廃材を活用してマルチやコンポストづくりをしたり、病害虫

の対策にハーブや野草を取り入れたりして、環境負荷の少ない栽培を試みた。
　また、会員が自主的に、陸稲栽培を実験したり、リンゴやベリーを育てたり、梅干しなどの加工品を作ったりして楽しんだ。
　養鶏は、わずか４～５羽だが丁寧に飼育し、鶏卵を得るとともに教育・体験プログラムの教材として有益だった。

　ワインぶどうの栽培と醸造は、これまでどおり登醸造やじきの畑の指導・協力のもとに実施した。黒とう病については、化学農薬に頼らず共生していく方針とし、ツル取りや病果除去、石灰硫黄合材や納豆菌の散布でコントロールした。
　夏の高温、秋の強雨などの自然環境に加えて野生生物の被害もあり、苦戦する農家が多数かった中で、エコビレッジで合計約 1.3 トンの健康なブドウを収穫できたのは、ビンヤードクラブの尽力が大きい。例年どおりスパークリングワインとジュースをそれぞれ仕込み、また、ピースワインについては、ユナイテッドピープルにブドウを販売し、登醸造で試作品を醸造している。

５　地域貢献活動
　余市町の委託事業で、「余市おためし移住ツアー」を２月、７月、８月、１０月の４回実施し道内外から 15 名が参加した。町内の飲食店や農家の訪問、移住者との交流、季節の景色や料理が好評を得た。参加者の中にはツアーをきっかけにエコビレッジに入会したり、移住した人もいる。本事業の受入や交流会に参加した余市町民は 76 名（重複含む）にのぼっており、地域内の情報共有やネットワークづくりにも貢献した。
　その他、ブドウ収穫期に近隣農家の作業を手伝ったり、健康増進や住民交流に関する区会のイベントに協力したりして、地域活性に寄与した。

６　運営体制
　経理などの基本的な事務、教育研修プログラム、ピースワイン・プロジェクトについては会員に業務委託し、日々の農作業については、短期中期のインターンや会員がボランティアで担った。

７　広報事業
　ホームページやＳＮＳなどで積極的な情報発信を行った。
　外部の広報アドバイザーに委託して、会員・アンバサダーを拡大する特設ページを作った他、効果を分析したり、戦略を検討したりした。

８　その他
　スタッフが町内の有機農家を視察したり、十勝の陸稲農家や沼田の自然学校、黒松内で行われた NICE のギャザリングに参加するなどして研鑽を積んだ。中でも大崎さんは、コミュニティ研究会の合宿研修（千葉県いすみ）に参加したり、地域エネルギー事業の先進事例（神奈川県藤野他）を訪問したりして、自身の学びや交流の機会を得るとともに、体験を広く共有するイベントを開催して活動に還元した。

＜第２号議案＞　2025 年度収支決算（案）　別紙

寄付者ご芳名一覧

2025 年度の当法人の事業に対して、ご寄付をいただいた方のご芳名（１万円以上）を掲載させていただきます。
みなさまのご支援に対し、深く感謝申し上げます。

井出上 昭彦
木原 茂明
仁科 健二
猫塚 義夫
安田 寿美子

（敬称略・五十音順）

＜第３号議案＞

2026 年度事業計画について（案）

１．　概　況

長引く紛争に加え、アメリカのベネズエラやイランへの武力侵攻によって世界情勢が混沌を極める中、国際的な協調はますます厳しい情勢となっている。日本国内も、夏の高温による自然生態系の変化や野生生物の異常な行動など環境の悪化は疑いなく、一次産業の持続的経営や食料の安定供給は一層困難に向かうことが予測される。超高齢化社会で地域コミュニティは崩壊に瀕し、生活者の経済不安や外国人差別の傾向が強まっているのも憂うべき課題である。

HEPP は政治的な行動を意図する団体ではないが、市民自らの力で豊かな生活基盤を築くとともに、依存から自立への道を模索し、持続可能な方向性を社会に提示するミッションを掲げている。世界の大きな流れを厳しく見つめながら、誰かに託す姿勢ではなく、自分の足元から自分の力で変えていくこと、それを少しでも広げることで社会改革の担い手となりたい。

今シーズンは、会員による自主企画・自主運営を促し、できるだけ多くの人が実践者として行動するチャンスを創出したい。「地域エネルギー自給」や「ピースワイン・プロジェクト」などの重点プロジェクトは一歩ずつ前進させつつ、広く参加を呼びかけて普及に力を入れる。

また、団体の環境、社会、経済的な価値を外部に表現できるように、活動成果を検証・分析に努める。さらに、会員・アンバサダーの獲得をはかるとともに、道内外で同じようなプロジェクトに取り組んでいる人や団体とリアルな対話イベントを開催し、実践者を育てたり、互いに協力し合うネットワークを構築する。

２．　余市エコカレッジ（主催事業）

「農的暮らしの連続講座」、「ハーバルライフを楽しむ講座」、「cinemo 映画鑑賞会」などの主催イベントを積極的に開催し、団体の目指す考えを発信したり、実践や体験の場を広く提供する。

重点課題の「省エネ、創エネ」については、ソーラーシェアリングで発電した電気を電気自動車のバッテリーに蓄電し、それをシェアハウスで利用することで、電気の自給率を高める。また、灯油に頼っている暖房を、バイオマスや太陽熱温水などの再生エネルギーにシフトする方法を検討する。

地域における共助を目的とする「よいち未来共創プロジェクト」（秋山記念生命科学振興財団の助成による）については、昨年実施したオフグリッドワークショップをバージョンアップさせて、太陽光発電の実践にも挑戦する。さらに、近隣住民の参加を呼びかけ、地域資源のマッピングや避難訓練を実施して、災害に強いまちづくりを目指す。

ワークキャンプは春、夏、秋の３回開催する。恒例のカーディフ大学に代わり、台湾の大学生による団体キャンプや、ピースワインの収穫やPRをする国際キャンプを計画している。

また、エコビレッジのスパークリングワインが10ビンテージ目を数えるので、ワインづくりをテーマにイベントを開催し、団体の活動を広く広報する。ワイナリーツアーは「ウェルビーイング×エコビレッジライフ体験ツアー（仮称）」に取り込む形で実施する。

さらに、坂本の書籍出版記念にあわせて、東京、大阪、兵庫、福岡などで HEPP の事業を紹介し、会員拡大をはかる。環境やコミュニティというテーマに取り組んでいる各地の人や団体との関係性を深めつつ、イベントやツアーの共催につなげていきたい。

３．余市エコカレッジ/体験・研修プログラム（受託事業）

エコビレッジの暮らしや地域での実践をベースに、多様な学び手やグループごとの課題・要望に併せた企画、コーディネートを行う。（以下予定）

北海道大学農学部、北海道大学国際教育研究部、北海道教育大学付属中学校、
聖徳学園中学、あきた未来塾（秋田銀行）、IOB、シュタイナースクールいずみの学校、
かもしの里、十勝ナチュラルファームスクール、国立屏東科技大学（台湾）他（順不同）

４　教育ファーム

刈草や剪定枝、台所の生ごみなどの廃材を活用したコンポストづくりや、レイズドベッドによる不耕起栽培を少しずつ拡大する。野菜をはじめ季節の実りを計画的に加工・保存して自給を向上させるとともに、アンバサダーやゲストへのギフトにしたい。また、自給用、体験プログラム用に鶏を飼い、廃鶏のスープなど加工にも力を入れる。

ワインぶどうの栽培と醸造は、これまでどおり登醸造やじきの畑の指導・協力のもとに実施する。化学農薬に頼らず、ツル取りや病果除去、適切な散薬でコントロールする。管理作業については主にビンヤードクラブと住み込みスタッフやボランティアが行う。
また、ピースワインのコンセプトや意義を広めるために、留学生や海外研修など多国籍の参加者を募って交流イベントを実施する。

なお、スパークリングワインは引き続き登醸造で、ピースワインの試作については、今年度からじきワイナリーで委託醸造する。

５　地域貢献活動

昨年に引き続き、ブドウ収穫期に近隣農家の作業を手伝ったり、住民の交流や健康、防災などのテーマで区会の事業に協力する。
余市町の委託事業で行っていた「余市おためし移住ツアー」事業は終了したが、主催事業として継続する予定である。エコビレッジを通じて生まれた関係人口の拡大が、町にポジティブな効果をもたらしていることをPRしていきたい。

６　運営体制

これまでどおり、庶務・経理などの事務、教育研修プログラム、ピースワイン・プロジェクト、ホームページの管理については業務委託の形で、日々の農作業等については、短中期のインターンスタッフや会員がボランティアで担う。

７　広報事業

ホームページやＳＮＳなどで積極的な情報発信を行い、広報アドバイザーの力も借りて効果的な戦略を実行する。

８　その他

団体の活動意義や成果を分析し、広く知らしめるとともに、事業のステップアップをはかるために、環境、社会、経済的な価値を見える化する。

会員の主体的な参加による小さなプロジェクトを奨励する。リペアカフェや量り売り、季節の加工品づくり、りんご栽培、炭焼き、キノコ栽培、動画制作、音楽イベント、シニアシェアハウスなど、会員の発案を事務局がサポートする形で実現させたい。

＜第４議案＞　　収支予算案　別紙

＜第５議案＞　　役員の改選

定款附則３より、理事及び監事の改選を行う。
候補者は以下のとおり

坂本純科	理事	再任
石倉昭男	理事	再任
伊藤規久子	理事	再任
村田　均	理事	再任
宮藤秀之	理事	再任
愛甲哲也	理事	再任
櫻井百子	理事	再任
大崎美佳	理事	新任
眞屋幹雄	監事	再任